
桜、散る刻まで

かむいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜、散る刻まで

【Nコード】

N9105A

【作者名】

かむいる

【あらすじ】

飯島和樹。いいしま・かずきそれが少年の名前。和樹は、高校へ入学した日、きつと平凡な日々が続くのだらうと半ば諦観めいた思いでいた。しかし、そんな時に目に付いた一本の桜の樹。それに魅入った和樹は、その桜の樹の下で、ある女の子と出会う。これは、あまりにも儚く悲しい、そんな二人の物語――。

桜が、咲いた刻に

——四月。

幼稚園児は小学生へ。

小学生は中学生へ。

そして、中学生は高校生へ。

暖かい日差しを受けて、すくすくと育つ新芽たち。

春の優しい風に吹かれる感触が妙に心地良い。

虫や動物たちの新たな生命がこの季節に目を覚ますのだ。

飯島 いいじま・かずき 和樹は、そんな穏やかな四月五日に高校へと入学した。

入学式が行われた。

お偉い方々の、うんざりするような決まり文句。

在校生たちが新入生を歓迎する言葉を送った。

そして公立高校の統一テスト——つまり高校受験——で最高成績を叩き出した新入生の挨拶。

例に倣った、つまらない入学式だと、和樹は思った。

入学式が終わり、クラス発表の掲示板が張り出される。

和樹は自分の名を懸命に探す。

1組、2組、3組、4組………あつた、5組だ。

特になんとも思うことは無かった。
学区外のため、知り合いなどいない。

それに、一人のほうが気楽だ。そう思いながら、和樹は校舎へと向かう。

ふと、足が止まった。

校庭の脇に咲く、一本の満開の桜。

この季節、桜などは別段珍しくも無い。だが、一本だけというのが和樹の興味を惹いた。

理解不能の好奇心。和樹自身ですら、胸のうちから湧き出る感情を把握できずにいた。

あれはただの桜だ。間違いない。……でも、何か、ありそうな気がして。

——そこへ自然と足が向かっていた。

桜の近くまで歩いてくる。

目線を上にあげながら満開の桜を見た。

素晴らしいだとか、美しいだとか、形容できるような言葉が自然と口からこぼれる。

「綺麗……だなあ」

しばらく、その場に立ち尽くした。

ピンク色の桜の花びらが風に吹かれて飛んでゆく。

その内の一枚を掴もうとするが、花びらはスルリと掌を抜けていった。

「きみ、桜が好きなの？」

少しだけ驚いた。

桜にだけしか目がいかず、周りを見ていなかった。

隣にいたのは女の子。しかも同じ新入生のようにだった。

「あたしは、嫌い」

女の子は視線を桜へと向ける。

その目には、憂いのようなものが見て取れた。

「……え？」

和樹は無意識のうちに訊き返していた。

彼女の言っていることが、いまいち掴めなかったからだ。

すると女の子は和樹と視線を合わせ、言った。

「桜は、あたしと同じ。だから、嫌いな」

彼女の口調は重苦しいものだった。

女の子はそれだけ言うと、足早に歩き去っていく。それを和樹は目で追った。

「……誰だあ、あの子」

つぶやいた。

和樹の目の前を桜の花びらが舞い降りていく。

「こんなに綺麗な桜が嫌い、か。しかも自分と一緒にだなんて、どういっこつたる？」

首を傾けながら少女の後ろ姿を見送る。

そして再び視線を桜に戻した。

舞う花びら。

鮮やかなピンク。

たった一本の美しい大樹。

——和樹は、少女の事を頭の隅で考えながらも、その桜から目を離す事は出来なかった。

写真部へ

入学式が行われた日から一週間が経とうとしていた。

授業も始まり、退屈な時を過ごす飯島 和樹は教室の窓側の席に座っていた。

「おい、飯島。この問題をやってみろ」

「……え？」

和樹がとぼけた声を出すと、クラス中に笑いがおこった。

「飯島。いつまでも春休み気分でいるんじゃないぞ。じゃあ、上野やってみろ」

黒板の前に立つ先生は特に咎める様子もなく和樹の後ろにいる上野という男に質問の答えを求めた。

和樹はうんざりしたように頬杖をついて窓の外を見る。

和樹は未だにこのクラスに馴染めずにいた。

特に仲の良い友達もいるわけでもない。

それでも周りの同級生たちは和樹に話しかけて来たこともあった。和樹はそれに曖昧に答えるだけで、会話はそれ以上続くはずもなかった。

和樹の座っている窓側からは校庭の全景が眺められる。

自然と視線は鮮やかに咲く桜の木に向いた。

入学式から一週間経っても色褪せることのない美しい一本の桜。

それをしばらく眺めていると、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

教師が荷物をまとめて出ていくと、ガタガタツと机や椅子がずれ、同級生たちが立ち上がりはじめた。

「部活行こうぜ！」

「早く行かないと、先輩に怒られちまうよ！」

そんな事を言いながら教室から出て行く同級生の後姿を見送る。

和樹には、彼らがなんとも、自分とは違った、充実した生活を送っているように思えた。

「……部活、か」

学生バックを背負いながら、つぶやいてみた。

たしかに学校と家の往復だけでは、つまらない高校生活になってしまう。

部活見学にでも行ってみるか。そう思って、和樹は教室を後にした。

学校内を歩き回ってみた。

漫画研究会、茶道部、華道部、射撃部、科学研究部…… e t c。

パツとするようなものが無い。

和樹は校舎を出て、グラウンドを見てみた。

坊主頭の青年が白球を追いかけている。

——運動部は、イヤだな。

和樹は高校生になっても運動部だけには入らないと決めていた。
決して運動が苦手だからではない。あるコンプレックスが和樹の
中に根強く残っているのだ。

中学生の頃、運動会するとき。

和樹はクラスの中で最も速かった。そのため、リレーではアンカ
ーを任されていた。

その頃は和樹も運動が大好きで、普通の子供となんら変わりは無
い少年であつた。

だが、運動会のリレーの時。

和樹のクラスはとても遅く、順番がアンカーに回ってくるまでに

他のクラスは既にリレーを終えていたのだ。

たった一人残された和樹は、多少なり笑いを含んだ応援を受けながら走るハメになった。それが原因で、和樹は運動が嫌いになった。他の人はくだらない理由と言うかもしれないが、子供の頃の記憶は根強く残るものだ。

「声出して行きましょー！」

「頑張っていこー！」

元気な声がグラウンド内に響き渡る。

そこを和樹はしばらく見つめる。だが、すぐに興味なさそうにソップを向いてしまった。ソップを向いた視線の先に映る桜の樹。そこに目を止めて、樹から飛ぶ桜の花を目で追った。

「きみ、野球部にでも入るの？」

突然、後ろから声がした。

振り向いて声の主を見してみる。いつか、あの桜の木の下で会った女の子だった。

「あ、いや、俺、野球部には入らないよ」

「ふーん、そうなんだ。じゃ、どこの部活に入るの？」

この学校の制服を着た女の子。

一般には可愛いと言われるレベルの少女だった。

和樹は照れながら、女の子の問いに答えた。

「いや、まだ決めてないんだ」

ふーん、と再び少女は言った。

そして桜の樹に視線を向けて、和樹に尋ねた。

「きみ、あの桜好きなの？」

「え……う、うん、まあね」

そう言つと、少女は輝きが溢れんばかりの笑顔になった。

そして和樹の制服の袖を引っ張つて、歩き出した。

和樹は戸惑つたが、抵抗はしなかった。

可愛い女の子に誘われるのは悪い気はしない。それに、どうせ退屈していたところだ。

「じゃあ、あたしが部活を紹介してあげる。来て」

グイグイ引っ張られて、校舎の中を歩いていく。

そして階段を上り、少し歩くと足を止める。

そのドアには大きく書かれた見出しが張ってあった。

——『写真部』と。

君と巡る、恋の序章

「ここって、写真部…？」

和樹は戸惑いながらも尋ねた。

運動部はイヤだったが、文化部でも華がある部活が良いと思っていた和樹。

写真部といったら、なんと薄暗い部屋で写真を現像している印象しかない。

「そうだよ。あたしも写真部なんだ」

彼女はそう言って、『写真部』と書かれたドアを開け、中に入ろうとする。

仕方がないので、和樹もそれにならって部屋に入った。

「きみ、写真に興味ない？」

「いや、まあ、別に…」

曖昧な返事をする。

しかし女の子も和樹が乗り気でない事は理解したようだった。

少し表情を曇らせて、和樹の制服の袖を放した。

「でも…きみ、綺麗な景色には興味あるでしょ？ だからあの桜を見てたんだよね？」

たしかに桜を見ていたのは、綺麗だと感じたからだ。
だが、それとこれとは話が違う。別次元だ。

「でも俺、写真を撮るのって、別に好きじゃないんだ。カメラの事とかも良く分からないし…」

「カメラの事なんか分からなくても良いの。大事なのは、カメラじゃないくて、撮る人本人なんだから」

彼女は部屋の中に進んでいく。
そして奥にある机の上に置いてあるカメラを手にした。

「写真は、綺麗な景色や物があるから撮るんじゃないの。自分が撮りたいと思うものを撮るの」

手にしたカメラを再び机に置く。
そうして、和樹と視線を合わせて、和樹の方へ歩み寄っていった。
手を伸ばせば届くほどの位置で止まり、彼女は右拳を和樹の心臓部へと押し当てた。

「大事なのは、ココ。感じる心、想う心がカメラのシャッターを切るの」

しばらくの間、沈黙が流れた。
和樹は彼女の視線から目を逸らせずにいた。

彼女の瞳からは強い意志みたいなものが感じられた。

「なあってね」

冗談めかしたような口調。和樹は面食らった。

そして彼女はニコツと笑顔になった。

「クサくて、カッコいい事言ってるけど、結局は部員が欲しいの。部を作るには最低二人以上の人数がいなくちゃいけないの」

彼女は笑っているが、目は陰っているように和樹には思えた。

「去年までは人もいたらしいんだけど、今年はあたし一人らしくてあたし写真が撮りたいんだ。自分が想った事、感じた事を残したくて…」

努めて明るく言おうとしている。

和樹は、心に何か残ったような気がした。

「ゴメンね、付き合わせちゃって。ホントにゴメン…」

「いいよ」

「え？」

……心は決まった。

和樹はそう思って、強い口調で言った。

「俺、写真部に入るよ。いや、入りたい。俺もそのとき想った事、感じた事を写真に残してみたい」

その言葉を聞いて、彼女の顔に笑顔が広がった。

今度の笑顔は、偽りのない満面の笑みだった。

「ホ、ホント？ ホントに、ホント？」

和樹は首を縦に振った。

肯定の証。

「ねえ、一つだけ教えて欲しい事があるんだ」

和樹がこの女の子と出会って、知りたいと思った事。
それを今聞いてみようと思った。

「なに？」

「君の名前は？」

彼女はキョトンとした顔で和樹を見た。
そして笑顔で答えてくれた。

「あたしは、水木 早百合。みずき さゆりっていの」

「俺は、飯島 和樹。宜しく、水木さん」

「水木でいいよお、飯島君」

「じゃあ、俺のことは和樹でよろしく」

和樹には窓の向こうから射す夕日が、とても眩しく見えた。

それと同じくらい、早百合の事も眩しく見えた。

それでいて彼女が、とても儚げに——見えた、ような気がしていた。

美しく、儂い景色

「はい、今日はここまで。ちゃんと復習しておくように」

六時間目の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、教師がそう言った。

クラス内の生徒たちは、それを聞いていないかのように席を立つ。和樹も学生バックをとって、教室を出た。もちろん復習などするつもりはない。

和樹は軽い足取りで目的の場所へと向かう。写真部と貼られたドアの前に立った。

そしてゆっくりとそれを開ける。

「あつ、来た来た」

中にいた女の子が明るい声で和樹に言った。

椅子から立ち上がり、ようこそ写真部へ、と丁寧にお辞儀をする。

「こちらこそ、水木」

和樹も深々とお辞儀した。
そうして同時に顔を上げるとプツと吹き出して、笑いあった。
和樹にとって高校入学以来、久しぶりに心底笑った気がした。

「さ、行きましょう」
「ん、どこに？」

和樹が尋ねると、早百合は机の上に用意しておいたバックをとって和樹に差し出した。

「もちろん、写真撮影に！」

和樹はバックを受け取り、その中を見た。
そこには大きなカメラが一台入っていた。黒光りするゴツイカメラだった。

「今から、どこに？」
「それはきみが決めるんだよ。自分の心に聞いて、その場所に行くの」

「……じゃあ、あそこしかないよ」

和樹はカメラを持って、部屋を飛び出した。

「あつ、ちょっと待ってよ！」

早百合も和樹を追って、写真部の部室を出た。
和樹は校舎を出て校庭を目指した。息を切らす事さえ忘れて、ただあの場所へと駆け出した。

早百合も靴を履きかえ、校庭に出た。そうして和樹の姿を探す。

早百合の予想通り、彼はあの桜の下にいた。

「この桜を、撮るの？」

「……うん」

和樹は桜を見上げながらバックの中のカメラを取り出して、レンズ越しに桜を見つめた。そしてカシャっという乾いた音がした。

「どう？ 気分は」

「……なんか、呆気ない感じ」

ふう、とため息をついた和樹がカメラをバックに収めながら言った。

和樹の表情は明らかに拍子抜けしたような感じだった。それは隣にいる早百合にも伝わってしまったようだ。

早百合は和樹からバックを引ったくる。

そして、言った。

「景色って、時間や場合、その時の感情とかでも、見える光景って
いうのが違うもんなんだよね」

早百合は和樹の手を引つ張り、歩き始めた。

そうして向かっていく場所は、校舎内だった。

「あたしが見せてあげる。心震わす景色ってやつをさ」

そうして連れられた場所は、屋上だった。
すでに時刻は5時を回っているので、例年の四月の中旬通り、太陽が西の空に落ちるところであった。

「わあ……」

鮮やかな夕焼け。

陽の当たる全てのところを赤く染めている。

そして影となる部分は長く伸び、昼間より黒く見えた。

——感動。

まさにその一言だった。

和樹は赤い太陽を見つめ、何も言えずにいた。

「この場所、あたしのお気に入りの一つ」

早百合はバックからカメラをとって、それを構えた。

今にも太陽は西に消えていこうとしている。早百合はその一瞬を見逃さなかった。

カシャッと音がした。そして太陽は西に沈んでいった。

「どう、わかった？」

早百合が和樹のほうを振り向いて言った。

その顔には爽やかな笑顔が浮かんでいた。

「うん、すごく、綺麗だった…」

和樹は早百合を見つめた。

微かに残る夕日をバックにした早百合が笑顔で佇んでいる。

すごく綺麗だった。和樹は再びそう言った。

この言葉は夕日に向けたものではなく、早百合に向けたものだった。

「でしょ？」

もちろん、早百合は和樹の言葉を夕日に対する感想だと受け止めた。

早百合はカメラをバックにしまい、和樹に近づいていった。

「さ、今日の部活はこれでお終い。また明日も頑張ろうね」

明るい声で早百合は歩き出した。

それに続いて和樹も歩を進める。

部室に寄って、カメラを置く。そして鍵を掛けた。

帰り道の道中、少しの間だが和樹と早百合は一緒に帰った。そして別れる。

和樹は夕闇の中を一人で帰る。その時、急に足を止めた。ふと、先ほどの景色を思い浮かべた。

真っ赤な太陽、黒く伸びる影、そして笑っている早百合。

和樹は自分の中で、早百合の存在を、強く……意識し始めていた。

異変へ

「なあ、飯島」

クラスでの昼食時、和樹は声をかけられた。
入学から一ヶ月以上経っているのだ、ある程度の友達くらいなら
出来るだろう。

「なに？」

弁当を頬張りながら、和樹が尋ねる。
すると、話しかけてきた彼の顔が一気に紅潮した。

「あのさ、お前、二組の水木ちゃんと仲良いよな？」

「あゝ、まあそうかな」

「あの子って彼氏とかいるの？」

「……さあ、わかんないな」

和樹はそつけなく答えた。そして再び昼食を頼張る。

だが、頭の中では今の問いを巡らせていた。水木に彼氏がいるのかどうか。

一ヶ月近く共に風景写真を撮っているが、そんな雰囲気は感じない。

彼氏と思われる人物からのメールや電話など和樹の知る範囲ではきていない。

それでも、いないとは言い切れない。

実際の所、どうなんだろう…。

和樹は箸を止めて、考えに耽^{ふけ}った。

「おい、飯島。どうしたんだよ？」

「あ、いや、別に。何でもないよ。」

友達に呼び掛けられ、ハッと我に帰った。

とりあえず、弁当箱の中に残っているご飯をたいらげ、友達の話に耳を傾ける事にした。

「二組のさ、水木って子がすっげえ可愛いんだよ。なんかさ、守ってあげたくなるような子だよ」

「へえ〜。そんな子と、飯島が仲良いのかよ？」

「まあ、同じ部活だから」

適当に返事をするが、頭の中は早百合の彼氏のことについてばいだつた。

和樹はここ一ヶ月の記憶を辿ってみる。

電話やメールをしてきたのは、彼女の家族だけであつたはずだ。

もちろん早百合は、おせっかいな母親を邪険にせず、優しい口調で通話していた。

「でさ、飯島。お前に一生の頼みがあるんだ。水木ちゃんにさ、彼氏いるのかどうか聞いてくんねえかな？」

和樹は、それはいい案かもしれないと思った。

それならこの友達をダシにして、自分が聞きたいことも分かるからだった。

和樹は快く返事をする。

「ああ、いいよ、そんなくらい。任せとけて」

よっしゃ、とガッツポーズをする友達。

お前は本当にいいヤツだな、とも付け加えた。

そして昼休みが終わり、5、6時間目もあっという間に過ぎた。

「んじゃ、頼むぞ。飯島！」

友達はそう言い残して、クラスから出て行った。

彼は野球部所属で、自分のバットとグローブを手にして走っていた。

和樹もバックを持って、写真部の部室へと向かう。

水木は来ているだろうか、どう話を切り出せば良いだろうか。

そんな事ばかりを考えて歩いていた。

「あれ、まだ来てないのか」

写真部と大きく書かれた古臭いドアの中を覗きこんで、言った。
部屋は真っ暗で和樹は手探りで電灯のスイッチを探した

「ええっと、どこら辺だったっけ……。お、あつたあつた」

パチン、と小気味いい音がして蛍光灯が灯る。

そして教室の中に入っていくと、見慣れた人物が部屋の奥の方で突っ立っていた。

——早百合だった。

和樹は困惑した。

電気も付けずにいた理由が分からない。早百合はゆっくりと和樹に視線を動かした。

彼女の瞳は、紅く染まっていた。

「み、水木……？」

「もっ遅いよっ」

彼女の表情とは、まったく逆の明るい声が返ってきた。

そして和樹に笑いかけた。普段と変わらない、魅力的な笑顔だった。

だが、明らかにいつもと違う。和樹はそう感じていた。

「どうしたんだよ。部屋ん中、真っ暗にして」

「えっとね、ちょっとお昼寝でもしようかな、なんて」

いつもと変わらない笑顔と口調。

それでも和樹は違和感を覚えていた。

どこか、彼女の笑顔が陰っているように見えた。

「あっ、そうだ。俺のクラスのヤツが、水木に彼氏がいるのか聞きたがってた」

和樹はバックを机の上に置きながら、切り出した。

早百合は相変わらず、陰った笑顔でそれを聞いていた。

どうなの、と和樹が答えを促すと、早百合は笑顔で答えてくれた。

「あたし、彼氏なんていないよ。その人にも伝えておいて、あたしはフリーだって」

いたずらっぽく笑う早百合を見て、和樹は思った。

泣いてるようにも見えただけ……気のせいだよな、と。

そしていつも通りに部活動をする。カメラを手にして、校内を回ったり、校庭で景色を眺めたり。

そこで和樹は、あの桜に目を止めた。

既に花びらは散っており、葉桜になっている。

それもそれで趣深かったりするが、やはりピンクの花びらのほうが良い、と和樹は思った。

「桜って、なんというか、儚い……よな」

「え？」

和樹の言葉に、早百合はひどくうろたえた。

しかし、そんな早百合には気づかないで、和樹は言葉を続ける。

「だって、咲いてから二週間くらいで散っちゃうんだぜ。雨が降ればあつという間だし、なんか悲しいよな」

思ったことを口にした和樹が早百合を見た。

しかし和樹に顔は見えなかった。早百合はうつむいて声を殺すようにして泣いていたのだ。

顔を手で覆っている早百合に和樹は驚きを隠せなかった。

「ど、どうしたんだよ。俺、そんなイヤな事言った…?」

和樹がそう言っても、早百合は泣き止むことはなかった。
和樹はただただ早百合の隣で立ち尽くすだけだった。

「う…めん…ね、急に…」

幾ばくかの時間が経ってから、掠れた声で早百合が言った。
相変わらず顔はうつむいて手で覆ったまま。

和樹は戸惑って何を言ってよいか判らずにいた。

「…ごめ…ん、今日は…帰るね…」

それだけ言うと、早百合は踵を返して走り去ってしまった。
一人取り残された和樹は呆然として立ち尽くしていた。

次の日、和樹は自分の席でぼんやりと窓の外を眺めていた。
何をしていても、昨日の事が頭から離れない。早百合が泣いて、

走り去ったこと。

そしてそれは自分のせいなのか、ということ。
和樹は頭を抱えて、深いため息をついた。

「水木、部活来るかな…？」

願望の念を込めてつぶやいた。

窓の外に見えるあの桜の樹の枝の先に生えている葉っぱが、柔らかな風に吹かれて揺れているのを和樹は目の端で捕らえた。

六時間目が終わり、ほとんどの人が部活やバイトのために教室から出ていく。

和樹はポツンと取り残された気がした。急いでバックを用意して立ち上がる。

足取りは重いが黙って帰るわけにはいかない。
その念が和樹の足を写真部部室へと運ばせた。

写真部のドアの前に立つ和樹。

そろそろとドアを開けると、そこには見慣れた光景があった。
机、カメラ、そして早百合の姿だった。

「あつ、和樹君」

和樹の存在に気付いた早百合が小走りで行ってくる。
その表情に昨日の陰りは見えない。

「あの、水木、昨日は…」

「昨日はゴメンなさい！」

和樹の言葉を遮るようにして早百合が言った。早い動作で頭を何

度も上下させて、謝った。和樹は、拍子抜けしたようなホッとしたような気分になった。

「昨日は、どうしたんだよ？」

和樹がそう尋ねると、早百合は笑って答えた。

「えっとね、昨日ちょっと悲しいことがあったの」

どんな事？と聞きたい衝動に駆られたが、それは聞かないのが礼儀だと和樹は思った。

「でも、もう大丈夫だから。心配しないで」

笑う彼女を見て、和樹の悩みは吹き飛んだ。
何があったかは知らないけど——でも今は、笑った水木がここにいる。

笑っている水木が自分の目の前にいる。それだけで、充分だった。

「じゃ、部活しようか？」

「うん、そうだね」

早百合は机の上のカメラをとって、元気に腕を振り回した。

「さ、頑張ってこーっ！」

告白

学校の敷地内での景色は、ほとんど撮り終わっていた。
学校が終わる4時から6時頃までが部活動時間なのだが、それでは夕方の景色しか撮ることが出来ない。

赤く染められた光景にも飽きを感じ始めていた。

和樹はため息をついてから、早百合に話し掛けた。

「なあ、水木」

「ん、なあに？」

和樹とは違い、いささかも飽きを感じていない早百合はカメラのシャッターを切りながら尋ねた。

「夕焼けもいいけどさ、他の景色なんかも撮りたいよな」

「んゝそうだねゝ。じゃ、今日は夜の景色を撮ってみようか？」

「夜の景色？」

うん、と早百合は頷いた。

カメラをバックにしまって、腕時計をのぞく。針は5時を指していた。

「今五時だから、八時に学校の正門前に集合ね」

和樹は帰り道の道中、心踊るような気分で家路についていた。今にもスキップでも始めてしまいそうなほど舞い上がっていた。

「水木と夜の学校かあ」

自分の部屋に一人でいると、笑いが自然と込み上げてしまう。もちろん、目的は写真撮影だ。他意はない……が、それでも気になる女の子と夜の学校で会うのは、いつもと違った雰囲気になる。気持ちだけがはやるばかりだった。

「そろそろ行こうかな……。なにかあつたら困るし……」

時間は7時。和樹の家から学校までの所要時間は約30分。

出るのには幾分早い気がするが、いても立ってもいられない和樹は制服を着替えて早々と家を出発した。

「あつ、和樹君、早いねえ」

学校の正門前で早百合が8時5分前にやって来た。
和樹はその25分前に到着していたが、ここは決まり文句を言ってみた。

「いや、俺も今来たばかりだから」

そうなんだ、と言った早百合。
制服姿しか見たことのない和樹は、少しの間早百合に見取れてしまった。

自分を見てボクとしている和樹を早百合が不思議に思って話し掛けた。

すると封印が解けたようにビクツと反応をする和樹。

そんな和樹を見て早百合は思わず吹き出してしまった。

「え、俺、なにかした？」

「あはははは。どうしたの、ボクとして」

急いで体裁を取り繕うが、時すでに遅し。
とりあえず適当にごまかしてその場を凌ぐ和樹。

「ま…まあ、そんな事はいいいから速く学校に入ろっよ」

うん、と元気に頷いて校門をよじ登ろうとするのを和樹が制止した。

「俺が先に行って引つ張ってあげるよ」

「ありがと和樹君。気が利くじゃん」

よっ、という一声でヒョイと校門の上に登った。そして手を差し延べる。

その手をしっかりと掴んだ早百合を確認してから、力を入れて持ち上げた。

彼女は想像以上に軽かった。まるで子供を引き揚げているようだ。と和樹は感じた。

そうして無事、二人とも学校内に入ることが出来た。

「さ、張り切って写真撮ろーね！」

早百合は元気よくそう言うと、軽やかなステップで校庭の方へと向かっていった。

それに対して、和樹はさっき握った早百合の手の感触を思い出すとしていた。

初めて女の子と、気軽に手を繋いだ。今までに何度かそういう事態に陥ったこともあったが、あまりの緊張のせいであまりよく覚えていないのだ。

少し感慨に耽っていると、前のほうで早百合が手を振っていた。早くきなよーっと、和樹を急かしていた。

そんな元気な早百合を見て、和樹は心臓の鼓動が速まるのを感じた。不思議で、甘い感覚。そんなことを実感しながら、和樹は早百合のいる場所まで歩いていった。

「夜の学校って……なんか不気味だね」

校庭の中心部辺りに立った早百合が校舎を見ながらそう言った。その横で佇んでいる和樹も同意を示した。

早百合が、その闇が包む校舎にカメラを向ける。

レンズ越しに見るこの闇の光景はどのように見えるのだろうか。和樹はそんな事を考えながら早百合の姿を眺めていた。

「ねえ、きみも撮りなよ」

早百合は和樹にカメラを手渡して言った。

和樹は辺りを見回し、自分の納得できる光景を探した。

——俺が撮りたいもの……。

周りは闇に覆われ、見えるものは少ない。

それでも一枚くらいは撮りたいと和樹は思っていた。

自分が、夕焼けじゃなく他の景色がいいと言ったのだ。

俺が撮りたいもの。

……あつた。

俺が、撮りたいモノ。

「水木」

星がきらめく夜空を見上げていた早百合が振り向いた。

和樹は彼女が振り返った瞬間にシャッターを切る。

カシャと、乾いた音が響いた。

「……あたし？」

「そ。俺が、撮りたいもの」

和樹がそう言うのと、早百合は嬉しいような恥ずかしいような微妙な表情を取った。

「なんであたしなの？」

早百合が尋ねながら和樹に近寄って来た。

たったそれだけのくせに、和樹の心臓は破裂寸前まで跳ね上がっていた。

「もしかして、惚れちゃった？」

早百合がいたずらっぽく言った。和樹には、彼女の顔がほのかに上気していたように思えた。

和樹は早百合の目を見ながら囁くように言った。

「……そうだよ」

その瞬間、時間が止まったように和樹は感じた。

早百合がどんな目で何を考えているのかと思うと、一瞬の時間が永遠に感じたられ。

和樹にとっては、初めての告白だった。

女の子に告白されたことはあるが、自分から言ったのは初めてであつた。

「…………ゴメン。あたしはやめておいた方がいいよ」

早百合の表情が先程とは違ってかわって、暗く悲しいものになっていた。

「俺じゃ、ダメ？」

和樹も断られる覚悟ができていたのか、冷静にそう尋ねた。
早百合は首を横に振って、訴えるように言った。

「違うの。あたし、あたしね……」

早百合の肩がかすかに震えている。

瞳は微かに赤みを帯びているように見えた。

そして、今にも泣き出しそうな声で、早百合は言った。

「あたし、もうすぐ死んじゃうの」

早百合は本当に小さな微笑を浮かべて言った。
それでも、声は震えていた。

「——あたしね、死ぬの。死んじゃうの」

和樹は地に根が生えたように呆然と立ち尽くしていた。

早百合は微笑を浮かべたまま凍りついている。

「……なんか、暗くなっちゃったね。帰ろうか？」

早百合は努めて明るく振る舞って和樹に言った。

そうして校門で別れて、足早に歩いて帰っていく早百合を和樹は黙って見送っていた。

和樹には早百合の後姿が、おぼろげな、儚い夢のように思えた。

家に帰った後も、和樹は早百合の口から出た言葉を反芻していた。

——あたし、もうすぐ死んじゃうの。

信じられるか。心の中でそう叫んだ和樹は眠れぬ夜を過ごした。

朝、目が覚める。

いや覚めてはいない。寝ていないのだ。
目の下に大きなクマがある。

「くそつ、寝れねえよ」

しばらくベッドの上で何も考えずにいたが、時計を見て、急いで起き上がった。

学校に遅刻してしまう。和樹は学生バックを持って、部屋を飛び出した。

学校への登校中、和樹は何度も早百合の姿を思い返していた。

昨日の夜の早百合の言葉を聞くまで、和樹は早百合と会うことを楽しみにしていた。

だが今では会うことが辛く感じられる。自然と足取りも重くなっていた。

和樹は自分のクラスに入って、椅子に腰掛ける。

そのまま何度かチャイムが鳴って、授業が行われて、昼に弁当を食べて、また授業が行われた。

和樹はそれを聞くでもなく早百合の事を考えるのでもなく、ただ窓の外を眺めていた。

六時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。教科書を開いている教師が、さつさと教室を出て行った。そしてガタガタと生徒たちは部活に行ったり、帰ったりするのだった。

「おい、飯島」

呼びかけられ、振り向くと、そこには友達が立っていた。だらしのない笑顔を浮かべている。

「なあ、水木ちゃんに聞いてくれたかよ？」

「……………なにを？」

和樹は心が沈んでいくのを感じた。早百合の名前は出さないで欲しかった。聞くと、心が苦しくなるから。

「とぼけんなって。彼氏がいるかどうかだよ」

「……………わりい、まだ聞いてない」

「そうか。じゃ、今日聞いといてくれよ」

その友達は、残念ながら教室を出て行った。

おそらく部活だろう。先輩が恐いので、遅れないよう急いでいた。

こっちはそれどころじゃないんだ！

和樹は友達に向けて、心の中で叫んだ。

早百合には彼氏を作る時間すらない。お前みたいに、呑気に女探

しなんて出来ないんだ。
そう思つと、和樹は目頭が熱くなるのを感じた。

「……………」

和樹は写真部部室の前で佇んでいた。
中に早百合はいるだろうか。いたら、なんて声を掛けられればいいだろうか。

そんな事を頭の中に巡らせながら、和樹は部室のドアを開けた。

「おつ、和樹君。お疲れ」

部屋の中でカメラの手入れをしていた早百合がそう言った。

彼女の笑顔。いつもと変わらない魅力的な笑顔。しかし和樹には、それが色褪せて見えた。

カメラを机の上に置き、早百合は立ち上がった。

「ねえねえ、昨日さ、良いところ見つけたんだ。学校の裏の空き地にね……」

和樹が惹かれた、この笑顔、この声。
昨日までなら違和感なく話せただろう。
だが、それはもう叶わない事だった。

「綺麗な花を見つけたの。小さくて紅い花。それでね？」

「……やめてくれ……っ」

「他にもいっぱい色々な花があったから、今日はそこに行こうかな
って——」

「——やめてくれっ！！」

和樹が叫んだ。

そうせずにはいられなかった。

彼にはその彼女の笑顔が魅力的で、儂すぎたから。

「なんで笑ってるんだよ……！？　なんで笑っていられるんだよっ！
？」

あまりに大声で言ったので、廊下に声が漏れたかもしれない。
それでも構わないと、和樹は思った。

「水木、死んじゃうんだろ！？」

早百合の瞳が和樹を捉えていた。

しかし和樹は、その早百合の視線から目を逸らせずにはいられな
かった。

彼女の瞳を見つめるのは、和樹には辛すぎた。

和樹はうつむいてから再び叫んだ。

「なんで……なんで笑ってるんだよ！？　悲しくないのかよ、水木
！？」

それだけ言ったあと、しばらくの間、沈黙が流れた。和樹は恐る恐る早百合を見た。早百合はうつむいて、唇を固く結んでいた。

そうして、か弱い小さな声が、和樹の耳に届いた。

「……どうして、そんな事、言うの？」

微かにしか聞き取れない声。

しかし放課後の学校とは静かなもので、外からの雑音はほとんどなかった。

和樹は確かに早百合の声を聞いた。

早百合は続ける。

「死んじやう人は、笑っちゃいけないの？ 死んじやう人は、悲しい顔しかしちやいけないの？」

涙を含んだような声だった。

鼻をすすってから、早百合は顔を上げて、和樹を見つめた。瞳は赤く染まっていた。

「死んじやうから、残された時間が僅かだから、笑っていたい。そう思っちゃ、いけないの？」

「そ、そんなこと言って——」

「——言ってるわよ——」

早百合は叫んだ。

涙が溢れて止まらなかった。

次から次へと流れる涙が、早百合の頬を伝っていく。

早百合は制服の袖で目をこすりながら言った。

「きみは自覚してないかも知れないけど……っ」

早百合は息を切らしながらも、続けた。

「君の、あたしを見る目つきは変わってる。壊れやすいものを、大事に大事に扱う人みたいに。あたしを可哀想だとか哀れだとか、そう思ってる目付きで見てるっ！」

和樹は心の底を覗かれたような気がした。

早百合が死ぬ、と聞いてから、和樹は確かに早百合を傷付けないように接しようと思っていた。

「あたしを、死んでる人を見るような目つきで見ないで……っ！」

さっき拭った目から、再び涙がこぼれてくる。

しかし、今度は早百合は拭わずに涙を無視した。

「あたしは、まだ死んでない。まだ、生きてるんだ。君と同じように、心臓が動いてて、血が巡ってて、手も足も、動くんだ。……涙だって、流れるんだ」

涙でくしゃくしゃになった顔を両手で覆って、早百合は言った。

「あたしも、君と同じように、生きてるんだ……。もうすぐ死んじやうけど、まだ、死んでないんだ。まだ、普通の人間として、笑っていたいんだ……！」

はあはあと息を切らして早百合は流れる涙をふいた。

目まいがする。頭がゆらゆらして体が言うことを聞かない。

早百合は足元がおぼつかないのを感じた。

すると、心臓に強い痛みが走った。激痛が心臓を突き抜ける。

たまらずに早百合は膝が折れて、倒れた。部屋の床にうつ伏せた。

「……水木………みずきっ!!?」

和樹が倒れた早百合に駆け寄った。

早百合は苦しそうに左胸を抑えて、喘いでいた。

和樹はポケットから急いで携帯を取り出す。震える手で番号を押した。

119、と――

決意

和樹は病院の待合室のソファーに腰掛けていた。

膝の上にひじを置き、手を強く組んでいる。

和樹の視線は一点を見つめていた。『手術中』と赤い光がついて
いる所を凝視していた。

のどが渴いた。お腹が減った。すごく眠い。

そんな感情はとうに忘れ去り、今はただ祈っているばかりだった。

「……………みずき……………」

和樹がそうつぶやいたとき、病院の出入口の自動扉が開いた。

すでに病院自体は閉まっている時間だった。それでも入ってこられるということは、早百合の親類に違いなかった。

さきほど、和樹は早百合の生徒手帳から自宅の番号を探して、電話を掛けた。

『早百合さんが、大変なんです！』それだけしか言っていないのに、その家族は事情をしたように『分かりました！　どこの病院ですか！？』と尋ねたのだった。

それから二十分。やっと早百合の家族が病院に駆けつけてきたのだ。

「きみが、私の家に電話を掛けてくれた、飯島君だね？」

「……………ええ、そうです」

和樹が視線を声のした方に向けると、そこには四十代後半の男性と女性が立っていた。

早百合の両親だと和樹は思った。それを裏付けるように、娘はどこですか、と和樹に尋ねたのだった。

和樹は黙って視線を『手術中』のランプのついた部屋に向ける。

そうですか、と早百合の父親は落ち着きなく言った。

「……………水木——早百合さんの病気は、いつ頃からなんですか…？」

和樹は、ここでは水木というより早百合と言ったほうが良いと思った。

早百合の母親は戸惑った表情をして、父親に訴えかけるような仕草をした。

あなた、こんな見ず知らずの子に教える必要はないわよ。母親の目はそう語っていた。

しかし父親は母親をなだめた。和樹を見据え、威厳ある口調で言った。

「お教えしましょう。早百合の病気について…。」

「あなた！」

母親が遮るように言ったが、父親は厳しい目付きで母親を見た。

「彼は早百合を助けてくださったんだ。話くらいするのが礼儀だろう」

話は、病院の待合室で始まった。

父親は懐かしそうに虚空を見つめながら、口を開いた。
和樹はそんな早百合の父親を見ていた。

「あの子の病気が発症したのは、二年前の春でした」

父親は物静かな口調で言う。

母親はこの場にはいなかった。早百合が手術を受けている部屋の前で、元氣なく待っているのだ。

「今は高校一年生ですから、中学の二年生のときです。あの子——
早百合が家に帰ってくるなり、胸が苦しいと言ってきた」

「……………」

「あの頃は私たちも、早百合は元氣な娘だと思っていました。そんな娘が辛そうな顔で、苦しいと言うものですから、急いで病院へと

連れて行きました」

「……そこで、病気を宣告されたんですか？」

「ええ、なんでも未だに名前すら付いていない病気だそうで……。いわゆる『不治の病』というやつです。早百合は、その病気に侵されていたんです」

父親は胸元から煙草を取り出した。

「良いですか？」

「どうぞ」

和樹がそう答えると、ライターを手にして火を付けた。

一息吸って、白い煙を吐き出した。そして灰皿の上で煙草を叩くと灰がその上に落ちた。

「その病気というのは、なんとも複雑なものでして……。まあ、簡単に言えば、一種の心臓病なんです。心臓の機能がどんどん低下していき、最後にはその機能自体を失ってしまう」

煙草を灰皿に押し付けて、火を消した。

父親はもう一本取り出そうとする仕草をしたが、思いとどまって止めた。

和樹が回りに漂う煙草の煙を払っているのを見たからだろう。

「ですから運動したり興奮したりして、心拍数が上昇すると発作が起きることも度々でした。でも、今回のような事態は初めてです。よっぽど、君と興奮する話でもしていたんでしょうな……」

和樹は胸が痛むのを感じた。確かに彼女は興奮していた。

だが、それは自分が彼女を悲しませたから。傷つけたから。泣か

せてしまったから。

父親は冷たい目で和樹を見た。

自分の娘の病気を発作させたのはお前だ、と言わんばかりの視線。しかし和樹はそれに弁明をするつもりは無かった。

責任を感じていた。早百合が倒れたのは、自分のせいだった。

「あなた」

待合室の入り口に早百合の母親が立っていた。

彼女が父親を呼んだ時の目は、いくぶん安堵の色が伺えた。

「手術が終わったわ。早百合は、寝てる。明日には面会も出来るそうよ」

「……そうか」

心の底から安心したように父親は言った。

そうして立ち上がると、和樹の肩に手を乗せた。

和樹は早百合の父親を見上げる。

「家まで送っていきましょう。私の車は外にある。ついて来てください」

早百合の父親はそう言って、足早に外へと向かった。

和樹は入り口に立っている早百合の母親に目をやった。

だが彼女は視線を合わせるのを嫌がるように、そっぽを向いてしまった。

「……失礼します」

和樹はそう言って、母親の横を通り過ぎた。

今は何も話してはくれないだろう。和樹はそう思っていた。時期がきたら、必ず話そう。和樹はそう心に決めて、病院を後にした。

車で家に帰る道中、和樹と早百合の父親は必要最低限のこと以外は話さなかった。

家の場所、道順だけを伝えて、それきりだった。

家について車から降りる時、ありがとうございますと一言だけ言っ
て、ドアを閉めた。

車はエンジン音を響かせて再び病院の方角へ走行を始めた。

和樹はベッドの上で寝転がっていた。

明日には面会できるそうよ、早百合の母親はそう言っていた。

明日、病院へ行って早百合と話そう。和樹はそう決心してから布団をかぶった。

布団の中での暗闇の中で、和樹は早百合の言葉を思い出した。

『あたしも、君と同じように、生きてるんだ……。もうすぐ死んじやうけど、まだ、死んでないんだ。まだ、普通の人間として、笑って

いたんだ……っ！』

彼女は、死んでいない。

生きているんだ。自分と同じように。

まだ伝えられるんだ。自分の想いを。

必ず伝えよう。

心の中でそう思うと、睡魔が和樹の意識を奪っていった。

告白、再び

朝、目が覚めるといつもの天井が目に入る。

和樹はゆっくりと起き上がって、大きな伸びをした。

そしてベッドから降りた。今日はのんびりと出来る。

都合のいいことに、今日は休日であった。

時計に目をやると、十時を指していた。

病院の面会時間は一時から。今から用意すれば、余裕を持って行動できる。

――午後12時。

今の時間に家を出れば、1時過ぎくらいには病院に着けるはずだ。和樹はバックを用意して家を出発した。

病院までは自転車で行くことになる。

六月ももうすぐなので、暑さは日に日が上がっている。額に軽い汗をかきながら和樹は自転車をこいでいった。

病院に着くためには、最後に急な上り坂をいく必要がある。

和樹は息を切らせながらも上りきった。そしたら病院は目と鼻の先だ。

自転車を駐輪場へと止めて、病院に入る。

おそらく中は冷房がきいているだろう。和樹はそう期待して自動ドアをくぐった。

「あの、昨日入院した水木早百合さんの病室を教えてくださいませんか？」

期待通りの涼しい病院内のロビーの受付で和樹は尋ねた。受付嬢の看護婦さんが愛想良く答えてくれた。

「二階の209号室になります」

看護婦さんは微笑を浮かべながら言った。

和樹は、「どうも」と一礼をして階段へと向かう。

昔に一度だけ、病院に世話になった事がある。風邪をこじらせて肺炎になったときだ。確かあの時は十歳だった。その時に飲んだ薬が苦かったという印象から、和樹はそれ以来薬

を服用しなくなった。

風邪は食べて寝れば治る、が和樹の信条だった。

209号室は、案外あっさりと見つかった。

階段を上りきってから1つ角を曲がったすぐそこだ。

プレートには『水木早百合』と書かれている。しかも個人部屋のようだった。

「……………」

ドアの前に立つ。

すると昨日の事が鮮明に浮かんできた。

早百合の泣き顔、涙声、苦しそうな顔、息切れした吐息。

あまりに鮮やかに思い出せて、和樹は自分でも驚いてしまった。

「……怖気づいたのかよ、俺」

和樹は震えている手を見て、つぶやいた。

震えている。恐いのか。拒絶されるのが、恐いのか。

いや、違う。拒絶されるのが恐いのではない。

自分などが早百合を救えるかどうか、それが恐かった。

早百合は自分を信じてくれた。だからこそ、早百合は病気の事を話したのだ。

話してくれたからには、俺が責任を持って早百合を助ける。和樹はそう決心したのだった。

コンコン、とドアをノックした。

しばらくは返事がなかったが、ドアがゆっくりと開いた。

「……どなたですか？」

早百合と似ている声だが、少しばかり違っている。

和樹はすぐにその声の主が分かった。早百合の母親の声だった。

「飯島です。早百合さんの面会に来ました」

和樹はなるべく柔らかい口調で言った。

ドアの向こうから顔が出てくる。やはり早百合の母親だった。

「折角ですけど、娘は今寝ているので。どうかお引取りください」

冷たい口調であしらわれた。門前払い。

だが、和樹はそれも予想の内に入れていた。

早百合が激しい発作に襲われるようなことをしていた異性を、親が快く思うわけがなかった。

「寝ていてもいいんです。顔だけでも、見させてください」

「……お引き取りください。あなたを娘に会わせたくありません」
「……………」

和樹もさすがにここまで言われるとは思っていなかった。

言われるとしても、柔らかく拒絶されるだけだと思っていた。

だがきっぱりと、会わせたくないと言われては和樹にはどうしようもなかった。

「どうしたの、誰か来てるの？」

苦々しい思いで踵を返そうとしたそのとき。

中から、聞き慣れた彼女の声が聞こえてきた。

昨日まで聞いていた声だが、どこか懐かしく和樹の耳に響いた。

「……………起きてるんですね？」

「……………」

厳しい目付きで和樹を睨む母親。

よく見ると、彼女の目には大きな隈ができていた。

おそらく一晩中起きていたのだろう。疲れがありありと見て取れた。

「ねえ、お母さん。誰が来てるの？」

「……………飯島君よ」

とうとう諦めたように母親が言った。

彼女はドアを開けて、和樹を部屋に入れた。

「……………和樹君」

「よっ、水木」

悲しそうな表情の早百合に和樹は陽気な口調で挨拶をした。

早百合はベッドから起き上がり、姿勢を正す。頭がボサボサなのを無理やり抑えて直そうとしている。

そして早百合は母親に目配りをしてから、言った。

「ゴメン、お母さん。少しだけ外してくれないかな？」

母親は一つだけため息をついて、わかったわ、と言って出て行った。

早百合は和樹と視線を合わせた。目線を合わせて話すのは久しぶ

りだった。

「来るなら来るって言うてくれれば良いのに」

「それじゃあ驚かせられないだろ？」

そうだね、と早百合は笑顔で言った。

相変わらずの愛くるしい笑顔だった。

そうして早百合は少し目線を落としてからつぶやくように言った。

「昨日は、ゴメンね。言いたい事だけ言っで勝手に倒れちゃって……」

「良いんだよ、そんな事。それよりも俺、昨日の夜に考えたんだ」

和樹はベッドに座っている早百合に近づきながら言った。

そっいえば、彼女はパジャマ姿だ。それはそれで可愛いな、と思う和樹だった。

「俺、やっぱり水木が好きなんだ。それは変わらない」

早百合は恥ずかしがるように顔を赤らめた。

それでも笑顔は崩れなかった。

和樹が続ける。

「水木が好きなんだ。……俺と、付き合ってくれないか？」

「……………ダメだって、前にも言ったよね。あたしにはそんな時間は……………」

「違うだろ」

和樹が早百合を遮った。

和樹は早百合の目の前に立って、彼女の手を優しく握る。

細くて、か弱い早百合の手。それを慈しむように握り締めて、和

樹は言った。

「水木は、まだ死んでない。生きてるんだ。心臓も動いてて、血も巡ってて、手も足も動く。もうすぐ死んじゃうのかもしれない。でも今は生きてる。俺と同じように、生きてるんだ。……そうだろう？」

早百合の瞳が潤んでいるのを和樹は見た。

いまにも溢れ出そうな涙を食い止めるようにして、早百合は和樹を見上げた。

「そうだよ、そうだけど……っ！」

早百合の悲しみに満ちている目が和樹を捕らえた。

「別れが、さよならが、つらすぎるから……」

「ズルイぞ、それ」

「……え？」

和樹の手に込める力が少し強くなった。

それでも力を抜いているため、早百合が痛い思いをすることはなかったが。

和樹が真剣な瞳で早百合を見つめた。

「俺は、まだ水木の答えを聞いてないよ。付き合いたいのか付き合いたくないのか、どっちなの？」

「………あたしは……」

とうとう涙が、早百合の目の許容量を超えた。

頬を伝って、ベッドに滴り落ちる。

そして早百合は囁くように言った。

「あたしは、和樹君と、付き合いたいです。あたしも、和樹君が、好きです」

「……………良かった」

和樹は早百合の手を放した。
そして次の行動へと移る。

——和樹は、早百合を抱きしめた。

「俺がいるから。水木が笑っていられるように、俺、頑張るから」
「…うん、ありがとう……………」

和樹と早百合はお互いの存在を確かめ合うように、強く抱き合った。

残された時間は少ないのかもしれない。でも、その時間をずっと笑っていたい。

早百合は和樹の腕の中で、そう思って涙を流していた。

そしてともに歩むこと

和樹は早百合の病室を出た。

すでに二時間弱もの時間を彼女の病室で過ごしていた。彼女の話によると、明後日には学校にも行けるらしい。和樹は軽い足取りで病院を出ようとしていた。

だが、後ろから呼び掛けられて振り返る。そこには早百合の母親が立っていた。

「少し、よろしいですか…？」

はい、と答えて和樹は母親のあとを追って病院の中へと戻っていた。

自動販売機に五百円玉を入れて、母親はお茶のボタンを押した。
ゴトン、とお茶が出てきてそれを和樹に渡した。

「娘は——早百合は、もうすぐ、いなくなります」

死ぬや亡くなると言わないのは親心というものだろうか。
母親はお茶をもう一本買って、口を開いて一口だけ飲んだ。
和樹も渡されたお茶を飲み始めた。

「早百合は、私たち夫婦の間に生まれるにしては、素晴らし過ぎる子でした」

和樹は母親を見据えていた。
彼女は弱々しくうなだれて、ボソボソとつぶやくように言った。

「あの子は私たちの宝でした。だから2年前に病気を宣言されて、私たちは呆然としました」

母親の声が涙ぐんできた。
和樹はもう一口お茶を口に含んだ。

「だからこそ、私たちは早百合を傷つけないように大事に扱ってきました。あの子が悲しまないように……」

和樹は飲み干した缶をゴミ箱に捨てるために立ち上がった。
母親はうつむいたまま、少し震えているようだった。

「……早百合さんと病気について話したことはありますか？」
「……………いいえ」

あるわけないでしょう、と訴えるような目つきで、母親は和樹を睨んだ。

和樹も母親と視線を合わせる。彼女の瞳は、疲れが滲み出ているようだった。

「だって、病気の事だけでもつらいのに、家に帰ってまでそんな話をしたくないはずでしょう？」

「……そうですね。でも、彼女は——早百合さんは気を遣われることを望んじやいなかった」

和樹がそう言うと、母親は身を震わしながら和樹を睨んだ。
母親はあからさまに怒った口調で和樹を罵った。

「あなたに何が分かるんですか！？ 早百合の悲しみが、私たちの悲しみが、あの子が私たちの愛する娘だったってことの、何を！？」

金切り声を上げた母親は力なくソファに座り込んだ。
目からは、透明な液体が流れている。和樹は母親を見据えて言った。

「……もう、過去形なんですね」

明らかに当惑した様子で母親は和樹を見た。
和樹は構わずに続けた。

「『でした』とか『だった』とか、そんな言葉を使って……。彼女は、まだ死んじやいない。生きてるんだ、俺やあなたと同じように」

母親は何かを言おうとして、口をパクパクさせているが何も言えないでいた。

和樹には、見据える先にある女性の瞳がひどく弱々しく映った。

「早百合さんを分かっていないのは、あなたです。……………失礼します」

そう言葉を繋いで、和樹は一礼をしてから足を進めた。

そのまま後ろを振り返ることなく病院を出た。

早百合の母親は今どんな顔をしているだろう。

見たい衝動に駆られたが、和樹はそれを振り切って自転車をまたいだ。

そして、その日から2日が過ぎた。

和樹は心躍らせながら学校へと向かっていた。

早百合に会えるかもしれない。その思いが学校へと和樹を急がせ

た。

一校時目が始まってから六校時目が終わるまで、とても長いように和樹は感じた。

時計に目をやっても、なかなか進まない。一秒一秒がすごく長かった。

チャイムが鳴り響いた。

六時間目が終わり、生徒たちはいつも通りに部活やバイトに行く。和樹もその流れに乗って教室を出た。

目指すは、写真部部室だ。

大きく『写真部』と書かれたドアの前に立つ。

そして恐る恐るそれを開けた。中は、真っ暗だった。

「水木、来てないのかな……」

いつもなら必ず和樹よりも早く来ている早百合。

それが今日はいなかった。もしかしたら、まだ病院のベッドで寝ているのかもしれない。

和樹はきびすを返して、部屋を出ようとした。病院へと向かおうとしているのだ。

「あつ、和樹君。今日は早いね」

後ろから、聞きなれた声がした。

ドアの前には見慣れた制服をまとった女の子が一人。早百合が笑顔で佇んでいた。

「……水木」

「心配させてゴメンね。もう大丈夫だから」

大丈夫なわけがなかった。

早百合は死ぬ。しかも、もうすぐ。

和樹は詳しい期間を聞いてはいない。

聞く必要がないからだ。和樹は早百合を見つめて言った。

「……さ、部活しようぜ。季節の変わり目だから、きっと良い写真が撮れると思うよ」

「うん、そうだね」

早百合は部室内に歩を進めて、机の上にあるカメラを手にとった。それを上に掲げて目を細める。そして早百合は和樹にカメラを向けて、構えた。

シャッターを切る音がした。

「……俺？」

「うん、あたしが撮りたいもの」

「どうして俺なの？」

早百合は照れくさそうに笑ってから言った。

「きみが、好きだから。あたしの命が続くまで、きみと——和樹君と一緒にいたいから」

「……俺も。俺も、水木と一緒にいたい。ずっと笑いあっていたい」

和樹は思った。

早百合が死ぬまで、自分が一緒にいてやる、と。

彼女が寂しくないように、悲しくないように自分が支えてやるんだ、と。

死が二人を別つまで——死が二人を別けたとしても、早百合を愛し続ける、と。

近づく、最後の刻

それから一ヶ月は何事もなく過ぎ去っていった。

和樹と早百合は、写真を撮り続けていた。共に笑いあいながら。そうして夏休みが目の前に迫ってきた、七月の上旬…。

和樹はカメラを片手に、夕焼けで映える町並みを小高い丘から眺めていた。

隣には笑顔の早百合が。

暑さの残る夕方この時刻、二人は学校の近くにある丘へと上っていた。

「綺麗だねえ」

「ああ、そうだな」

二人が見下ろす町並み。

夕焼けで、赤く染まった静かな町。

西の空に太陽が落ちようとしている。

和樹はカメラを構えて、シャッターを切った。

「もう、六時を回ってる。そろそろ帰ろうか？」

和樹がそう尋ねると、早百合は首を横に振った。

「まだこの景色を見ていたいな」

「……そっか」

和樹と早百合は地面に腰を降ろした。

赤く燃える夕日が、二人を鮮やかに映し出している。

和樹が早百合を見つめた。その視線に気づいた早百合も和樹を見た。

そうして、お互いに噴き出して笑った。

そんなやり取りが彼らにとっては、何にも変え難い時間であった。

結局、二人が別れたのはそれから二時間後の八時過ぎだった。

和樹は別れ際に早百合に言った。

「また明日な」

「うん、学校でね」

笑顔でそう言った早百合を和樹はしばらく見送っていた。
彼女の後姿がどんどん遠くなる。

そして早百合も和樹が見送っていることに気づき、振り返って手を振った。

和樹も笑って手を振り返した。そして手を振り終えた頃には早百合の姿は見えなくなっていた。

次の日の学校。

放課後の部活動時間になっても、早百合は現れなかった。
不審に思った和樹は、彼女のいるクラスの女の子に尋ねた。

「すみません、水木さん、知りませんか？」

二人きりの時は水木と呼んでいたが、学校や第三者の前では『水木さん』と呼んでいた。

女の子はキョトンとした顔で、かぶりを振った。

「今日、早百合ちゃんは来てないよ」

休み、か。

和樹はそう思って、礼を言ってから部室に帰った。

そして少しの時間だけカメラを片手に景色を撮った。

和樹には、それが義務のように感じられたから。

五時過ぎには荷物をまとめて帰る支度をしていた。
そうして何事もなく家に着く。

ベッドに転がって、早百合の事を心配した。

——早百合が入院したという知らせを聞いたのは、その時から二日後のことだった。

「水木……!!」

和樹は全速力で自転車をこいでいた。

急な坂道に差し掛かる。ここを登りきれば、病院は目と鼻の先である。

スピードを緩めることなく、まるで風のように突き抜けていった。

病院の駐輪場を通り過ぎて、玄関まで自転車を走らせる。

入り口の目の前まで行くと、和樹は乗り捨てるようにして自転車を降りた。

急いで病院へと入る。開く自動ドアのスピードさえ、もどかしく感じた。

やっとドアが開いて、病院の中を走っていく。そしてロビーの受付まで進んでいった。

「あの、水木早百合さんの病室は!？」

息を切らせながら喋る和樹を、看護婦は不思議そうに眺めていた。和樹の真剣な眼差しを見て看護婦も急いだ手つきで病室の情報を調べ始めた。

看護婦はコンピューターを操作して早百合の病室を機械的な口調で言う。

「302号室になります」

それを聞いて、和樹は階段に向かって走り出した。階段を二段抜かしで駆けて行く。あっという間に三階へとたどり着いた。

302号室。

ここも前回と同じように個人だけの部屋のようだった。ネームプレートには早百合の名前しか載っていなかった。

「……………水木」

ドアにノックをしようと構えた。だが和樹はその手を止めて、ドアの向こうに耳を傾けた。中から、ボソボソと人が話す声が聞こえてきたからだった。

「……………それで先生。娘の状態はどうなのでしょう？」

和樹にはその声の主が一発で分かった。

早百合の声と似ているが、すこし疲れを感じさせる声。

早百合の母親だった。

「非常に言いにくいんですが……………娘さんの状態は危険です。心臓の

機能の働きが、分ごとに弱まっています」

和樹は愕然とした。

ドアの前で立ち尽くしたまま、絶望に飲まれそうになっていた。おそらくこの声は医者だろう。母親も『先生』と呼んでいた。

「……長く見積もっても、あと一週間で限界でしょう」

「そ、そんな……！ 早百合……早百合い……」

母親の泣き崩れる声が、部屋の前にいる和樹にも聞こえてきた。和樹も泣きたかった。泣いて叫んで、わめきたかった。

そうすることで、何もかもが解決するのだったら、迷わずやっていただろう。

早百合に対して何か出来るのだったら、何でもやっていただろう。

「……………ウソだ」

和樹はつぶやいた。

そしてきびすを返して、走った。

階段を下りて、ロビーを抜けて、病院を出て、自転車に乗って、坂を下っていった。

景色が飛んでいく。

和樹には、何もかもが虚無に見えた。

頭が働かなかった。ただ医者の言葉が、脳の中で反芻されていた。『あと一週間で限界でしょう』――。

家について、部屋に駆け込んだ。

急いで自転車をこいで来たので、息が上がっている。動悸も激しい。

七月上旬の暑さで、汗も額を伝っていた。

だけれど、そんなことは、今の和樹にとって、本当に些細なことに過ぎなかった。

「ちくしょう…！」

和樹は憎しみ押し殺すようにして、その言葉を放った。

手が震えるほど力が入る。全身がわなわなと心の底から湧き上がる衝動を抑えられずに震えた。

「ちくしょおおっ！！」

恐ろしいほどの力で、和樹は部屋の椅子を蹴り飛ばした。

椅子は宙に浮き、そのまま重力に従って床に叩きつけられた。幸いにも、椅子は壊れなかった。

「ちくしょう、ちくしょおおっ！！」

何かを破壊したいという衝動を、和樹は本能の赴くままに続けた。部屋が散乱する。もし家に家族がいたなら、部屋に飛び込んでき

ただろう。

だが今は家に誰もいない。和樹は固く握った拳をベッドに叩きつけた。

「ちくしょう、なんで、水木なんだ……なんで、水木なんだよ……っ！」

涙が頬を伝って、床にこぼれた。

歯を食いしばって涙を止めようとするが、叶わなかった。
腕で涙を拭いても、溢れるばかりだった。

「なんで、水木が死ぬんだよ……なんで水木じゃなきゃいけないんだ……っ！！」

和樹は部屋の中でうずくまって泣いた。
声を押し殺して泣いた。十六年という人生の中で、こんなに泣いたのは初めてだった。

うずくまっていたまま、和樹は拳を振り上げて床を叩いた。
手に残る痛みとあの医者言葉だけが、妙に現実感を伴って、和樹を襲った。

訣別の秒読み

和樹は自分の部屋のベッドの中にいた。

早百合の事を考えると涙が止まらなかった。

何をする気にもなれず、ただ無意味な時を過ごしていた。

早百合の入院した日から既に三日が経っていた。

残り四日。それが、医者言う早百合の寿命だった。

その時、携帯電話が軽快なメロディーを奏でた。

……着信中。そう表示されていた。画面には、水木 早百合と出ていた。

和樹の体に緊張が走る。恐る恐る携帯の通話ボタンを押した。

「……………もしもし？」

『……………和樹君？』

やはり早百合だった。

和樹は、自然と手に力が入ってしまっているを感じていた。

「……うん、そうだけど、どうしたの？」

『えっとね、あたし、今病院にいるの。来て、くれないかな…？』

分かった、すぐ行く。

そう返事をしてから携帯を切った。

一瞬だけだが、彼女の願いを断ることも、考えなかったわけじゃない。

それでも、早百合の声を聞いたことが、和樹にとって何よりも嬉しく思えるのだった。

まだ早百合は生きている。

それが分かっただけで、安堵と喜びの念が生じるのを和樹は感じた。

再び自転車を走らせる。

交差点を通り、道路を抜け、急な坂を上りきった。

今度は病院の駐輪場に自転車を止めて、入り口へと向かう。

病院の中に入った。

しかし受付には行かない。

早百合の病室は分かっているから。
302号室だ。

「……俺だよ、水木。入っていい？」

ドアの前でノックをする。

中から、どうぞという声が返ってきた。

ゆっくりとドアを開ける。中を見ると、早百合がベッドで横になっていた。

「久しぶりだね、和樹君」

随分とやつれてしまった。

彼女の肌は蒼白で、血も巡っていないようだった。

目は疲れが溜まっているかのように虚ろだった。

しかし笑顔だけは変わることなかった。早百合は、笑っていた。

しばらくは当たり障りのない会話を続ける二人。

しかし、早百合の表情が少しずつ曇っていくことに、和樹は気付いていた。

そして会話が途切れた一瞬の間。気まずい空白を引き裂く、早百合の静かだいて重みのある声が、病室に響く。

「あたし達、付き合ってるんだよね……？」

横になっていた体を起こそうとしながら、早百合は唐突に言った。

「……ああ、付き合ってるよ」

和樹も事実を口にした。

早百合は痛みを伴う体を酷使して、起き上がった。

「じゃあ、別れようか…？」

「え……—？」

突然の告白だった。

早百合は寂しそうな笑顔を留めたまま、和樹を見つめていた。和樹はさすがにためらいを隠せないでいる。

「どういう、こと…？」

「あたしはもうすぐ死んじゃう。分かるの、自分の体だから。……でも、あたしにはどうしようもない。どうにも出来ないの」

早百合は目に涙を浮かべながら続けた。

「このまま死んじゃったら、君は悲しむ。あたし、そんなのいやだから……ここで別れよ？」

「そんな、そんなこと…！」

和樹は何かを口にしようとしたが、出来なかった。

凶星だったから。自分の心を見透かされたから、和樹は何も言うことが出来なかった。

早百合には、和樹の心を読むことは容易い事なのかもしれない。

「いいの、大丈夫。あたしは平気だから。もう、別れよう。ね？」

和樹はそれ以上何も言うことが出来なかった。

黙ったまま、早百合の病室を後にする。力無い足取りで階段を下りていった――。

「……………何か言つてよ、ばかあ」

残された早百合は一人きりの病室でつぶやいた。
彼女の目から、涙がこぼれた。

「……………大丈夫なわけ、ないでしょ。君の事を考えて、想つて、出した答えなのに……」

涙を拭つて、独り言を続けた。

泣いているせいで、途切れながら言葉が紡がれる。

和樹に会えた。会いたくて、声を聞きたくて、勇気を出して電話をした。

そして、会えた。最初はとても嬉しかった。会えただけで嬉しかった。それこそ、涙でまともに彼の顔が見られないくらいに。

だけど、自分は死ぬ。それを誰よりも理解している早百合だからこそ、苦しくても、切なくても、泣き出しそうでも、和樹に言い切ったのだ。

——『いいの、大丈夫。あたしは平気だから。もう、別れようね?』と。

和樹の去る際。

彼の顔は、とても見られないくらい、悲しそうだった。

絶望とか悲壮とか苦痛とか、言葉じゃ形容しきれないような表情で、病室を出ていってしまった。

それが何よりも悲しくて——自分が死んでしまうことよりも遥かに悲しくて、つらくて、早百合は嗚咽交じりの涙を流してしまう。

「……そんな…悲しそうな顔して。黙って…行っちゃって。あたしは、どうすればいいのよ…」

早百合は痛む左胸を押さえて、囁くように言った。

窓の外の景色が色褪せていく。そう感じながら、早百合は再びベッドに横になった。

「……………水木」

時間は午後六時。

面会時間は五時半までだ。それでも和樹は病院のロビーのソファに腰掛けていた。

看護婦が受付から出てきて、言う。

「すいませんが、面会時間は五時半までとなっておりますので、一般のお客様はお引取りを…」

みなまで言うな。

和樹はそう思って立ち上がった。

ここにいっても出来ることは無い。もう自分と早百合を繋ぐものは何も無いのだから。

和樹が病院を出ようとしたとき、奥の方でなにやら騒がしく駆け回る医師たちの姿を見た。

彼らの声が聞こえてくる。

「302号室の水木さんの容態が急変しました！」

「急いでください！一刻を争うんですっ…！」

彼らは急いで階段を駆け上がっていった。

和樹はその一部始終を見ていた。自然と足は早百合の病室へと向かう。

「ちょ、ちょっと、一般の人はもう病院内には入れないんですよ！」

「水木……水木……！」

看護婦の注意を無視して、和樹は階段を上っていった。

早百合の病室はとても騒がしくなっていた。

その部屋に入ろうとする和樹を看護婦が引きとめた。

「いい加減にしてください！彼女の命が危ないんです！邪魔をしないでください！」

「放してくれ！俺は……俺は水木をつ——！」

「……いいんですよ、看護婦さん」

突然、部屋の中から声がした。

その声の主が部屋から出てくる。

早百合の父親だった。

「彼を、ここにいさせても構わないだろうか？」

「ま……まあ、親族の方がそう言われるのでしたら……」

看護婦はそう言って、すぐごと引き戻っていった。

和樹は早百合の父親を見る。父親が言った。

「……早百合が、そう望んだんだ」

「え……？」

父親は視線を落として、うつむいた。

和樹は変わらずに父親を見ている。

「もし、早百合が危険な状況になったら、早百合が、傍にはきみにいて欲しいと、そう言ったんだ」

和樹は衝撃を受けた。

彼女がどれだけ自分を愛していたか、自分がどれだけ彼女を愛しているか、再認識した。

目から自然と涙が出てくる。

その時、部屋の中から白衣を着た男が出てきた。

眼鏡を吊り上げながら、早百合の父親の方へと近づいていく。

「……早百合——早百合は!？」

父親が尋ねた。

おそらく彼が医者だと分かっているからだろう。

「強心剤により、一応は、繋ぎ止めました。しかし危険な状況に変わりはありません」

和樹は医師の脇をすり抜けて、病室に向かった。

部屋に入って早百合を見た。

延命装置に繋がれた蒼白な少女が、そこにいた。

和樹は、力なくうな垂れている早百合の手を握った。

「——水木……!!」

涙が一粒、音も無く、床に……落ちた。

桜、散る刻まで

深夜の病院。

和樹は早百合の眠るベッドの横に佇んでいた。

彼女の両親もいるのだが、彼らは疲れのためか寝てしまっている。和樹だけが早百合の顔を見つめていた。

「……………水木」

手を握りながら、つぶやいた。

一応、病状は安定したということで延命装置は外されていた。早百合はとても安らかな表情で寝ている。

だがそれも、今の一時の平静であることは、すでに医者の中から伝えられていた。

——もう長くない。今夜を越えることはもう絶望的だ、と。

「……………覚えてるか？」

早百合は寝ている。

彼女の両親も寝入っている。

和樹は、独り言のようにつぶやいた。

「あの桜の下で出会って、写真部に誘われて、水木が好きになって、今こうしてここにいる」

目頭が熱くなるのを感じたが、構わない。
どうせ誰も見てやしない。

「あの桜が無かったら、俺たちは出会ってなかったかも」

早百合の寝顔は変わらない。
規則的な呼吸音が響く。

「本当に水木の言うとおりだ。水木は、桜みたいだ」

涙が頬を伝っていくのを感じた。
それでも和樹はそれを拭おうとはしなかった。

「桜みたいに、優しくて、綺麗で……、夢くて。本当に一瞬だけ輝く桜みたいだ」

桜はたしかに、春の季節にしか咲かない。

だけどそれでも、次の年の春には、同じように美しい桜桃色の花びらを実らせる。

早百合が桜のようならば——また、会えるのだろうか？ 来年の春に、またあの場所で、初々しい二人のままで。

そんなことは在りえないと、和樹だって知っていた。

だが、奇跡を信じたかった。神様でも仏様でも閻魔様でもいい。
早百合を助けて欲しい。

和樹は、ただ切にそう願った。

「……………和樹君が泣いてるの、初めて見た」

和樹が涙を流しながら、祈るようにしているその時。

早百合がゆつくりと目を開けた。

弱々しく、微かにだが、確かに開いた。

「……………起きてたのかよ？」

「……………うん、ちよつと前にね」

早百合は和樹を見つめた。

泣いている和樹を早百合は嬉しそうに眺めた。

「……………なんだよ？」

「だって、あたしの為に泣いてくれたの、初めてでしょ？」

前にも何度か泣いたことがあるよ、と言うと早百合は、嬉しいなと答えた。

「……………もう、あたし、死んじゃうね」

「……………そんなこと、言うなよ。頼むから」

和樹を見て微笑む早百合。

和樹は早百合を愛しく感じた。

早百合の笑顔が、和樹は好きだった。

この笑顔を守るためなら何でもやってやれる。彼女を想う強い気持が、和樹の胸中にざわめいていた。

「もっと、色んな写真を撮りたかったな」

「え？」

「もつと色んなものを見て、感動したかった。あたしの心を――
――生きてきた証拠を残したかった」

和樹の中で、何かが生まれた。

早百合の言葉を聞いて、早百合の為に出来る事をしたいと思った。
そして、それはすぐに実行された。

和樹は早百合の体を両手で持ち上げた。

彼女を車椅子に寄せ、早百合の両親に気付かれないよう病室を出て行く。

「ど、どうしたの、和樹君？」

弱々しい声。

和樹は歩く速度を速めて、進んでいった。
病院の非常口から外へ出る。

そして駐輪場に着くと、和樹の自転車の後ろに早百合を乗せた。

「行こう、水木。最後の思い出作りだ」

和樹は自転車の速度を上げて、発進した。

到着したのは、あの小高い丘の場所。
今夜は雲もなく満天の星空だった。

「うわぁ、綺麗だなぁ」

早百合は視線を空に向けて言った。
和樹もそれに同意して、自転車を止める。
早百合をゆつくりと降ろしてあげた。

「ねえ、和樹君」

「なに？」

「きみが、あたしの事を好きになったのって、いつ頃？」

答えにくい質問だが、残された時間は少ないのだ。
和樹は正直に答えた。

「写真部に誘われて、写真は心で撮るものだって言われた時、かな」
「……そっかぁ。じゃ、あたしの勝ちだね？」
「え？」

「あたしは、君に出会った入学式の時から、君が好きだった。一目惚れってやつ」

早百合は屈託のない笑顔で言った。
顔は青ざめているが、微かに紅潮したのが和樹には分かった。

「なぁ、水木」

「ん？」

「目、閉じて」

素直に早百合は目を閉じた。

そして早百合が、「何するの？」と問いかけようとした瞬間だった。

お互いの唇が触れ合った。

軽く触れて、離れた。和樹は早百合を、早百合は和樹を見つめていた。

そして再び口付けをした。

今度は長い、長い口付けだった。

そしてしばらくの時が経った。

やっとのことで、お互い離れた。

「和樹君の、ばかあ」

早百合は、はあはあと息を切らせている。

それに、涙で顔がぐしゃぐしゃだった。

「こんなにドキドキさせて…。あたし、死んじゃうかと思った」

早百合は和樹を見つめながら言った。

彼女の左手が、胸を抑えていた。

「……あたしを殺そうとした、お返しだよ」

そう言って、早百合は和樹に口付けをした。再び、長い時がそのまま過ぎ去っていった。

そして口付けを終えようとした時には、彼女の体はぐったりしていた。

和樹は慌てて早百合を支える。彼女は相変わらずの笑顔だった。和樹は早百合の手を触れた。冷たさを、和樹は手の平に感じた。お互いが、手と手を強く握り締めた。

——和樹君。

——なんだよ、水木。

——……最後くらい、早百合って呼んでよ。

——うん。わかった。

——大好きだった。きみの事が。

俺も、早百合が大好きだった。

二つだけ、お願い事、してもいいかな？

ああ、いいよ。

一つ目。写真、撮り続けて。きみが生きた証を、撮り続けて。

ああ、わかった。

じゃ、最後の願い事。あたしが死んだら、あたしの事、忘れて。

……早百合。

死んじゃうあたしが、きみを縛り続けるわけには、いかないから。

わかった。努力……してみる。

うん。ありがとう。本当に、今まで、ありがとう。

……早百合……。

じゃあね、和樹君。あたしの大好きな人。

……早百合、そんなこと言うなよ、なあ？

……。

——早百合、早百合い!!早百合——っ!!

それ以降、早百合が目を開けることはなかった。
和樹は、満天の星空の中、早百合を抱いて、涙を流した。
早百合は、安らかな、優しい顔で、笑っていた。

.....早百合。

最後の願い事は、守れないよ。

俺は早百合を忘れない。絶対に。

俺が早百合の意思を継いで、早百合が撮り続けていききたかったものを、撮るから…。

最後の約束だけは、破らせてくれ。

エピソード　　そしてまた、桜が咲く刻に、

和樹は高校二年生として、新入生たちの前に立っていた。

部活動説明会の時間で、写真部の部長という肩書を背負っていた。目の前の多くの下級生の前で、写真部について語るのが和樹の仕事だ。

メモなどはない。前以て言うことを決めていたわけでもない。すべてをアドリブで、和樹はそれを行おうとしていた。

「写真部部長の飯島　和樹です。今、写真部は俺一人しかいません。本当は、もう一人、部長だったはずの人がいました。けれど、その人はもうこの学校にはいません。なので、俺が部長になりました」

写真部などに興味ないのか、ほとんどの生徒は周りと話していた。和樹は構わず続けた。

「きつと、写真なんて…、と思ってる人がほとんどだと思います。最初は俺もそうでした。でも、写真の素晴らしさを、景色に対する感動を、教えてくれた人がいました」

和樹はマイクを持った手で自分の胸を抑えた。
新入生たちも、少しだけ和樹に興味を示し始めたようだ。

「その人は教えてくれました。写真は綺麗な景色があるから撮るんじゃない。自分の感じた想いが、感動した心がシャッターを切るんだ、と」

自然と言葉が口から出てくる。
和樹は続けた。

「最初は俺もつまらなかった。そしたら、その人が言いました。心震わす景色を見せてあげる、と。俺はその景色に感動しました」

和樹の熱弁が新入生たちを取り込み始めた。
熱心に耳を傾ける者まで出てきた。

「写真は、生きています。景色が生きたものなら、写真も命を持ちます。もちろん、景色が美しいから生きるのではありません。撮る人本人が写真に命を与えるんです」

和樹は全体を見回して、マイクを下げた。

「これで、写真部アピールを終わります。興味のある人は、放課後に『写真部』と書かれたドアをノックしてください」

頭を下げて、ステージを下りる。その後ろから大きな拍手の音が聞こえてきた。

和樹は写真部部室で新入部員を待っていた。
しかし、誰も来なかった。予想していなかったわけではないが、
さすがに少し落ち込む。
時計は五時を指している。

「早百合がいたら、もっと違っただろうに……」

愚痴をこぼす。

自分ではやはり、早百合の代わりなど出来ないのだろうか。
早百合が残してくれたカメラを手に取る。そのバッテリーを確
認してから、和樹は立ち上がった。

「じゃ、最後の部活動として、やってきますか」

独り言をつぶやいて、部屋を出て行く。
目指す先は、あの桜だった。

「……あれから、もう一年か」

和樹は鮮やかに咲いた桜を見上げて言った。

早百合と出会った、一年前。とても長い一年だったような気がする。

和樹は目を閉じてから、早百合との思い出を脳裏に浮かべていた。

「……早百合。俺は約束通り、写真を撮ってる。でもよくよく考えたら、写真を撮り続けてる限り、早百合を忘れる事なんて出来ないと思うよ、多分」

和樹は笑顔で言った。

早百合は死ぬ間際まで、笑顔だった。いや、死んでも、笑顔だった。

和樹はそんな早百合を見習おうとしていた。

「写真部として撮るであろう最後の写真は、二人が出会ったこの桜だ」

満開の桜。

鮮やかなピンク色。

風に舞う花びら。

たった一本だけそびえる、大きな樹。

春の暖かい風が、和樹の頬を撫でた。

日差しも柔らかくて気持ちよい。

辺りを見回せば、新芽たちが新しい季節のためにせっせと準備をしている。

「……桜は、確かに儚いかもしれない。でも、この春という一瞬のために咲く。精一杯、輝こうとする。——早百合、きみは、いつも輝いていた」

そう言つて、カメラを構える。

レンズ越しに見える風景が、風によって揺れていた。
シャッターを押した。カシャッという乾いた音が響く。

「あ、あの！」

「……ん？」

声を掛けられて、和樹は振り返った。

そこには女の子が一人立っていた。

おそらく新生。胸のところに、入学祝いの赤いバッジが付いている。

「あたし、飯島先輩の部活動紹介を聞いて、感動して、写真部に入りたくなりました！」

女の子は上気した顔で、精一杯話している。

和樹はそれを静かな優しい目で見つめた。

「あたしも、感動する写真が撮りたいです！ お願いします！ 写真部に入らせてくださいっ！」

「——うん、わかった。歓迎するよ。ようこそ写真部へ」

「は、はい、ありがとうございますっ！！」

女の子は元気に声を出した。

和樹は桜を見上げながら思う。

——早百合。まだ写真部は続きそうだ。きっと来年も、この桜を撮りにくるよ。

「飯島先輩、どうかしましたか？」

女の子が不思議そうに眺めている。

和樹はそれに気づいて、ハツとした。

そして笑顔を取り繕った。早百合を想うと、自然と暗くなってしまっただ。

——だから、それまで待っていてくれ。必ずまた、きみに会いにくるから。

和樹は視線を女の子に合わせて、言った。

「さ、行こうか」

「え……どこにですか？」

「もちろん、写真撮影に——！」

爽やかな春空の下、暖かい風が今日も吹く。

短く、儚かった恋。それでも後悔など何一つ無い。

誇りに思う。彼女を——早百合を愛せた事を。

これからも愛し続けるという事を——。

和樹は、早百合のいない、新たな道を、今歩き出した。

{
T
h
e

e
n
d
}

{
P
r
o
d
u
c
e
d

b
y

K
a
m
u
i
r
u
}

エピローグ　くそしてまた、桜が咲く刻にく（後書き）

今までのご愛読、ありがとうございます。

もしよろしければ、何か一言でも感想を残していたださい。

それでは、これからも小説を書き続けていくので、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9105a/>

桜、散る刻まで

2010年10月22日00時02分発行